

心の中に平和のとりでを、自分自身で築く

「ヒロシマ」に学ぶ平和の旅

「世界連邦・非核平和都市」を宣言する亀岡市では、毎年8月を平和月間と位置付け、さまざまな平和事業に取り組んでいます。8月22日、市内の中学生を対象に、被爆地である広島市を訪れ平和学習を行う「ヒロシマ」に学ぶ平和の旅を実施しました。



市民の皆さんの手による折鶴を奉納

広島市を訪れた23人の生徒たちは、被爆体験講話の聴講や、爆心地に最も近い小学校である本川小学校の平和資料館と広島平和記念資料館を見学し、原爆のすさまじい破壊力や被爆時の凄惨な状況

を体験しました。また、市民の皆さんへの平和の願いが込められた折鶴を「原爆の子の像」に奉納しました。



市内中学生23人が参加

「広島で学んだ経験を活かして来られたものです。市内では、移住定住促進施設・観光者向け宿泊施設である『離れ』にのうみに宿泊され、亀岡運動公園体育館でのトレーニングのほか、京都産業大学(京都市)で合同練習されました。

亀岡で事前合宿、トレーニングと交流

「オーストリア空手選手団来訪」

亀岡市と姉妹都市盟約を締結しているクニツテルフェルト市があるオーストリア共和国の空手競技選手団が、8月29日から9月3日、東京2020オリンピックにおけるホストタウンである本市を訪問されました。

今回の訪問は、東京2020オリンピック・パラリンピックを1年後に控え選手強化に力を入れる同選手団が、9月6日から8日、東京で行われたKARATE1プレミアリーグ出場のための事前合宿



さらに深まった交流の絆

また、歓迎レセプションでの浴衣の着用体験や保津川下り乗船、亀岡にある社寺の見学などをされたほか、稗田野小学校でのオーストリア給食体験を通じて児童たちと交流。厳しいトレーニングを重ねる一方で日本文化にも触れられ、亀岡との絆の深まりを感じていらっしやいました。



平和の大切さを学びました(広島平和記念資料館)

「被爆した人や家族を失った人の思いを社会につなげる人になりたい」「私たちは、心の中に平和のとりでを自分自身で築いていかなければならない」など、戦争の悲惨さと命の尊さをあらためて認識し、平和への願いを一層心に強く刻みました。

亀岡の魅力が詰まった冊子が完成

「京都・亀岡 暮らしと、ところ。」



あなたの「亀岡の見どころ」を探してみてください

「素敵なところ」を「散歩する／体験する／泊まる／特産物／歴史人物／シンボル」という視点でピックアップ。子どもたちにも「ふるさと亀岡」への愛着を深めてもらいたいという思いから、8月下旬に市内の小・中学校、義務教育学校の各クラスへ日本語版を1冊ずつ(英語版は各学校に1冊ずつ)配布。また、初めて亀岡の文化に触れる外国人に向けて英語版も作成しました。

市内の各書店やJR亀岡駅2階のかめまるマート、「森の京都」オンラインショップ、観光地などで販売(1800円+税)しています。亀岡の良さがぎゅっと詰まった冊子、ぜひ手に取ってご覧ください。

第四百五回

明智光秀

文化財めぐり

明智光秀と余部城

亀岡市で、明智光秀ゆかりの地と言えば、亀山城とやらんで余部城(余部町)を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。

余部城の成立は古く、有名な応仁の乱の頃まで遡ります。亀山城は、明智光秀が丹波に入った天正5(1577)年頃に築城されたと考えられるので、余部築城の時期は亀山城よりも100年以上前のことと言えます。

では、亀山城築城後、余部城はどうなったのでしょうか。天正6年頃には、明智光秀が、家臣の小島永明に対して「田中の方より人質をうけ取って余部まで来るように」とや「明日には余部近所まで来るように」と命じていることから、亀山城築城以後も、



▲余部城跡

余部が軍事的拠点として重視されていたことがわかります。ただし、この段階では余部は「余部」だけ登場し、「城」の記述が見えなくなることから、居城としての機能は、余部城から亀山城へ徐々に移っていった可能性があります。いずれにしても、余部城は戦国時代の亀岡市域を語る上で重要な城郭であったと言えるでしょう。

【史料】(天正6年)八月十五日付小島永明宛明智光秀書状
・年末詳卯月十二日付小島永明宛明智光秀書状